

## 日清貿易研究所・東亜同文書院の教育と卒業生の事例的研究

——高橋正二（研究所卒）・坂本義孝（書院第1期）・大内隆雄（書院第25期）の卒業後の軌跡——

愛知大学東亜同文書院大学記念センター研究員  
石田 卓生

### はじめに

本稿は、東亜同文書院とその前身校である日清貿易研究所の教育について、卒業生の活動を事例として明らかにしようとするものである。

日清貿易研究所（以下研究所）は、清国市場を見据えた商社の立ち上げをもくろんだ荒尾精が、その社員養成部門として1890年上海に設立したものである。彼は陸軍将校として従事した清国での情報活動の経験から、日中間の商取引が中国人主導であると見て問題意識を抱き、そうした状況の打開を企図して、清国を主な対象とした国際貿易を展開するために日清貿易商会の設立を構想し（日清貿易研究所 1890：1）、それに先だって教育部門である研究所を設立した。

荒尾が軍人であったことなどから、この研究所について情報機動的なイメージを抱く向きもあるが、商社の人材養成という性格や福澤諭吉の弟子で長崎商業学校校長であった猪飼麻二郎が教頭となっていること、さらにその教育内容の実際を見ると、軍事的要素などないビジネススクールであった。資金不足と日清戦争（1894-1895）の影響や所長である荒尾が1896年に急死したこともあって、わずかに1期生150名余りを輩出したただけで消滅している<sup>1</sup>。しかし、後に研究所幹部であった根津一が近衛篤磨率いる東亜同文書院に教育事業の担当者として招聘され、1901年に研究所と同じ上海に東亜同文書院（以下同文書院）を開校している。研究所の中国語教員であった御幡雅文が教壇に立ったり、研究所卒業生が教員となったりしていることからわかるように、同文書院は研究所とほぼ同内容の教育を施す学校であり、研究所の実質的な後身校であった（石田2016b）。

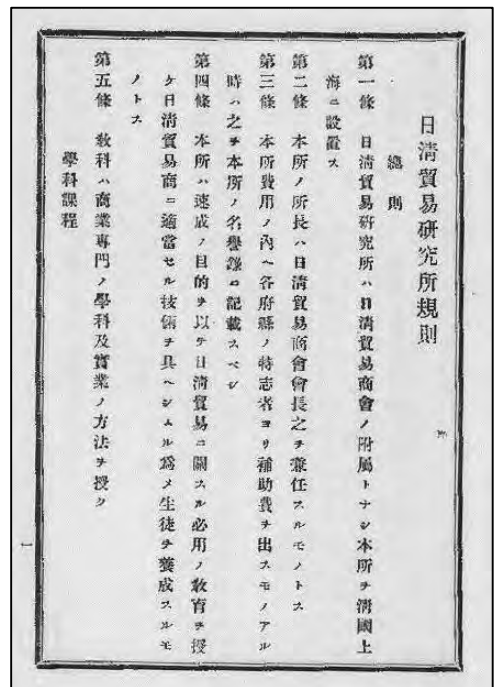


図1『日清貿易研究所規則』

<sup>1</sup> 日清貿易研究所の正式な学籍簿などは伝わっていないが、野口武の研究によると、日清貿易研究所に学んだ者で氏名を確認することができるのは153名である（野口2016）。

これらについては、日本の対中国進出や侵略を促進させる意味でのアジア主義の活動として批判的に捉えられることが一般的である。それは荒尾や根津が後に露骨な中国侵略を進めることになる陸軍の将校であったこと、卒業生や同文書院の運営母体である東亜同文会関係者の多くが中国進出あるいは侵略に関わっていたと捉えられることがあるからである。しかし、そうした見方の多くはさまざまな事象を積み上げた結論ではない。日本が中国を侵略したことから、戦前日本の中国に関わるさまざまな事柄の多くを侵略戦争と絡めたり、帰結させたりしようとするような思考に基づくものである。

研究所について言えば、それが設立された 1890 年当時、日本が清国に対して優勢であるという雰囲気も事実もなかった。清国は眠れる獅子と例えられる世界屈指の大国であり、近代化をすすめているとはいえ、日本は世界の東端にある小国でしかない。荒尾が目指したビジネスでは、列強諸国が圧倒的な国力を誇っているといっても、清国と列強諸国のビジネスの現場には列強のビジネスマンはおらず、清国の買弁が活躍する状況だった。日清貿易についても清国商人によって主導されており、例えば昆布流通の主導権を握るために日本側は 1889 年に日本昆布会社を設立したものの結局は清国商人の前に失敗しているし（函館市 1980 : 766-788）、1891 年上海領事であった鶴原定吉は日本の石炭輸出が清国商人に主導されていると述べている（石田 2016b : 58）。このような当時の状況を見れば、研究所を中国侵略の布石とするのは余りに荒唐無稽なことであることがわかる。

同文書院についても、その創立を日本の中国侵略との関わりで説明することは不可能である。開校は清国側に認められたものであり、開校式には地方政府の役人も出席している（石田 2007a）。第 2 革命の戦禍で校舎を失った際には中華民国の補償を受けているし、中華民国大総統黎元洪の揮毫が贈られるなど時々の中国政府に認められていたのである。また、日本人が中国留学する東亜同文書院だけではなく、中国人が日本留学する東京同文書院が同時期に設立されているように、「同文書院」は日清両国の若者に対して等しく教育活動を進めようとしていた。さらにキャンパスが置かれていた桂墅里高昌廟や徐家匯虹橋路は外国人が特権を持つ租界の外、すなわち中国のただ中であつた。このような状況の同文書院を情報活動に関わるとするのは限りなく妄想に近い。

たしかに戦前の日本は中国に対して侵略戦争を進めた。だからといって当時中国に関わっていた人間や団体を侵略者として総括することは不正確である。侵略戦争へと飲み込まれていく中で、日本人と中国人がどのように関わっていたのかは、実事求是によって正確かつ具体的に把握されなければならない。それは歴史事象の正確な認識に止まらず、現在の日中両国の人々の関わりについても大いに示唆を与えるものであると考える。

そうした考えに基づき、本稿では 3 人の人物を取り上げることによって、彼らが受けた教育や卒業後の活動から、同文書院ならびに前身校である研究所の教育の実態を具体的に明らかにする。

5,000 人に達しようかという卒業生の中で、高橋正二、坂本義孝、大内隆雄を選ぶのは、資料の問題と複雑な日中関係の中で一貫して中国との関わりを重視しつつ教育や啓蒙的な活動に従事していたからである。同文書院の教育を考える際にして、もっとも参考となりうるのはその影響を受けた教育活動であると考えられる。

## I 日清貿易研究所卒業生高橋正二について

### 1 ビジネスマンから教育者へ

高橋正二 (1870-1936) は筑後国久留米藩久留米城下 (現福岡県久留米市) に藩士高橋正幸の三男として生まれた。1886 年福岡県立久留米中学校 (現福岡県立明善高等学校) を卒業すると上京し帝国大学を目指す予備校である私立東京英語学校 (現日本学園中学校・高等学校) に入るが、1888 年には宮武外骨の兄南海経営の通信教育を行う出版社東京学館に勤め始め、『速成簿記学独修商用単式之部』(東京学館独修部、1889 年) を出した。1890 年久留米市選抜清国派遣留學生として研究所に入学し、1893 年卒業後は研究所の実習場である日清貿易陳列所に入っている。日清戦争開戦後に帰国すると、陸軍省雇員として第 2 軍附通訳官となり、戦後は台湾憲兵隊附通訳官となっている。1899 年三井物産に入り、廈門出張所や香港支店に勤務する。1902 年から 1907 年までは同文書院の教員なり、発音教材『北京官話声音譜』(東亜同文書院、1905 年序) をまとめた。1909 年には久留米市商業学校 (現久留米市立久留米商業高等学校) に転じて 1930 年まで中国語教諭を務め、1933 年からは九州帝国大学本部嘱託として中国語を教えた。



図 2 高橋正二 (久留米商業学校教諭時代) (久留米市立久留米商業高等学校・久商百年写真集編集委員会 1997)

高橋は在学中の日記を含む研究所時代の手記を書き残している。それは『在清見聞録』全 5 巻、『日記第二』、『雑書綴』という文書で、現在福岡市博物館所蔵の「鶴久文書」に含まれている。『在清見聞録』は中国の政治経済だけでなく社会や習慣について記された地誌的な記録を含むものだが、文中には福澤諭吉のビジネス書『実業論』(博文館、1893 年) が引用されたり、学生独力で書き上げるのは不可能な質と内容であったりすることから、研究所の講義に基づいて作成されたと考えられる。また日記からは、実際に開講されていた授業や研究所の学生生活の実態を知ることができる。こうした高橋文書から浮かび上がる研究所の姿は、中国語と英語を中心とした授業を行いつつ正確な中国事情を教授しようとする学校である。研究所は、教育内容はもちろん入学してくる学生にとっても、日清貿易に関するビジネススクールであった (石田 2016b)。

高橋は卒業直後から陸軍省雇員として通訳従軍しており、研究所と戦争がつながっているかのようにも見える。しかし、これは研究所に軍事的な性格があったことを示すものでない。

日本国内では 1886 年に東京外国学校が廃止されると 1897 年になるまで官立の中国語教育は実施されていなかった (石田 2016a : 38)。つまり研究所が存在していた時期は日本の中国語教育の空白期間だったのである。当然中国語を能くする人材は日清戦争では不足するのであり、そうした状況下におかれた研究所卒業生は否が応にも動員されることになった。研究所の教育が清国との戦争ありきでなかったことは、陸軍雇員となり、新領土台湾統治の初期に通訳として働いたものの、それは高橋のキャリアの完成でなかったことを見れば明らかである。彼には軍の中でキャリアを積み上げようと固執した形跡はなく、三井物産を経て、研究所の恩師である根津一や御幡雅文が教育活動を行っていた同文書院の教員となり、その後は一貫して中国語教育に従事していった。

高橋は研究所が目標とした日清間ビジネスに関わるビジネスマンとしての活動は短期間であったが、ビジネススクールである同文書院や久留米商業学校の中国語教員となることによって、研究所の教育を受け継いだのである。彼が同文書院から久留米市立久留米商業学校に移ったのは 1909 年であるが、これは久留米商業学校が正規科目として「支那語」を設置したタイミングであった (久留米市立久留米商業学校・久商百年史編集委員会 2002 : 141)。久留米市選抜清国派遣留學生として研究所に学び、その後身であ

る同文書院の教員を務めた彼のキャリアが評価されたのであろう。

## 2 同文書院「大旅行」の揺籃

同文書院の教育の特徴として挙げられることに学生だけで中国各地をフィールドワークする「大旅行」がある。同文書院の学生は教室で学ぶだけではなく、活きた中国を自力で調査し、その結果を卒業論文に相当する「支那調査旅行報告書」としてまとめていた。それは地誌学的な『支那経済全書』全12巻（東亜同文会、1907）、『支那省別全誌』全18巻（東亜同文会、1917-1920）、『新修支那省別全誌』9巻分（1941-1946）の元データとなった。

「大旅行」は同文書院5期生によって1907年から始まったとされているが、それほど大きな規模ではないものの1期生の頃から旅行先で課題について調査活動を行うことが行われていた（大学史編纂委員会1982:187-189）。これまで注目されてこなかったが、こうしたフィールドワークの発想は、同文書院の前身である研究所のカリキュラム構想の中にすでに存在していた。

『日清貿易研究所規則』のカリキュラム説明には「各地商業観察」（図3、3行目）とある（日清貿易研究所1890:5）。研究所のビジネス教育を踏襲したのが同文書院であることを踏まえると、「大旅行」のルーツは研究所に求めることができるのである。

しかし研究所でフィールドワークが行われたという記録はない。前掲の『日清貿易研究所規則』はあくまで開校時のものであり、資金難にあったことを考えると実現したか否かについては疑問符が附く。しかし1891年初めの段階でも3年生のカリキュラムとして、「各港を巡回をなし上海と其異同を視察し又支那商の物品の需要使用法より運輸交通の売買法及び風俗等を研究せしめんと欲す」（荒尾精1891:11）と説明されているように、研究所の教育項目として重視されていたことは確かであり、その姿勢は当然後身校である同文書院にも受け継がれたと考える。また注目されるのは荒尾が述べた調査項目が地誌学的であるということである。それは、「大旅行」に基づく「支那調査旅行報告書」や『支那経済全書』、『支那省別全誌』と共通するスタイルである。

このようなことから、同文書院の「大旅行」は研究所の創意に始まるものであると考えるが、本稿では両者を繋ぎうるものとして、これまでまったく注目されることがなかった高橋のフィールドワークを紹介したい。それは吉川三次郎『清国福建浙江両省内鉄道線路踏査報告書』（1901年）という三井物産による中国調査報告書に「附録」として付けられた高橋正二「閩浙両省視察報告書」である。三井の依頼で鉄道敷設の調査を行う吉川三次郎が1901年2月から6月にかけて福建省から浙江省を踏査しており、それに当時三井の廈門出張所に勤務していた高橋は随行した。

次に高橋の報告書の目次を引く。

一 税關及船積取扱法
一 商品研究
一 各地商業觀察
第七條 本所生徒ノ範圍トノ通商ノ盛シキニテ...
第八條 疾病其他ノ事故有テ年限中休業ニ...
第九條 各生徒ノ修業其他一切ノ費用ハ...
第十條 學術品行ハ勿論物質實際ノ取引止振替ノ者ハ...

図3 『日清貿易研究所規則』

福建省之部

- 第一 漳州府：廈門漳州間運輸交通ノ狀況；漳州地方ノ物産；漳州地方ヘノ輸入品；南太武炭坑ノ狀況
- 第二 同安県：同安廈門間ノ交通；同安地方ノ狀況
- 第三 泉州府
- 第四 安溪県
- 第五 永春州
- 第六 惠安県
- 第七 興化府
- 第八 福清県
- 第九 福州府：福州ヨリ各地ヘノ運輸交通；福州ニ於ケル綿糸ノ狀況；福州地方土布ノ景況；福州繭付木製造所ノ狀況；福州ノ石材；製茶業ノ景況
- 第十 羅源県及連江県
- 第十一 三都港
- 第十二 延平府
- 第十三 建寧府
- 第十四 建陽県
- 第十五 浦城県
- 第十六 日本対福建貿易ノ現状

浙江省之部

- 第十七 江山県
- 第十八 衢州府
- 第十九 龍遊県
- 第二十 蘭谿県
- 第二十一 嚴州府
- 第二十二 桐廬県
- 第二十三 富陽県
- 第二十四 杭州府：杭州府ノ地勢概況；杭州地方運輸交通ノ狀況；杭州ノ重要物産；杭州ニ於ケル輸入外国品；杭州ニ於ケル銀行通貨及商習慣
- 第二十五 福建、浙江両省ノ語言及土民ノ外国便ニ対スル状態

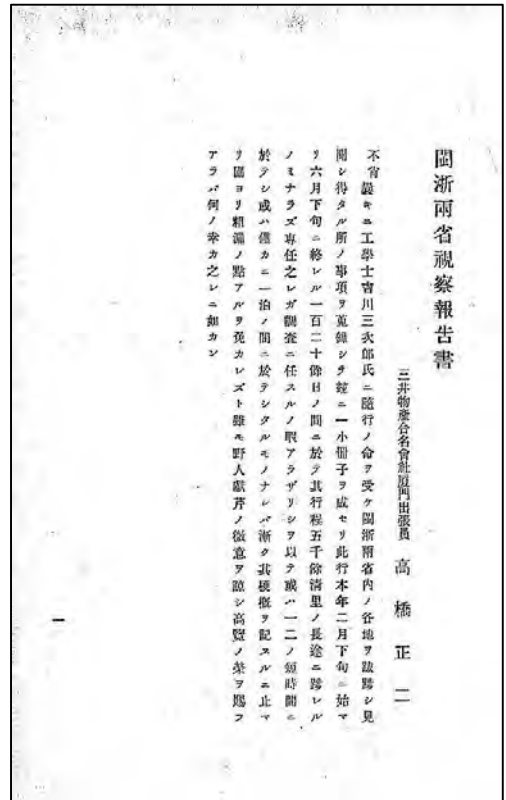


図 4 高橋正二「閩浙兩省視察報告書」

報告書の本文である吉川の文章は鉄道敷設についての調査を内容としているが、高橋のそれは目次からもわかるように完全に地誌的な記録である。その調査地点ごとに地域の特徴を記録していく手法は同文書院の「支那調査旅行報告書」に通じる。さらに、その淵源は研究所が刊行したやはり地誌的な中国百科事典である『清国通商綜覧』（日清貿易研究所、1892年）にまでさかのぼることができるだろう。

さて、ここで注意すべきは、高橋が1902年から1907年にかけて同文書院の教員であったということである。

前述したように、今日「大旅行」と称されているフィールドワークは5期生によって1907年から始められ、それ以前にも小規模ながら実地調査活動が実施されていた。これまで初期の「大旅行」については教員の根岸侷の果たした役割が弱調されてきた。例えば、同文書院の学校史では次のような説明がなされている。

根岸侷は明治七年生、和歌山の人。中国の経済開発と日中貿易、日中経済協力のための人材養成を目的とした書院教育の基礎を築いた最大の功勞者である。

明治三十四年、東京高商（一橋大の前身）を卒業すると直ちに創立早々の東亜同文会に入り、根津を助けて書院の創建に参画した。四十年には書院を辞している所以在職は六十年にすぎないが、書院の教科、とくに経済関係の学課の拡大充実に努めた功績は不滅のものがある。書院教科の最大の事業とされる「調査大旅行」を立案し、準備し、その実行を指導したのは根岸であった。（大学史編纂委員会 1982：262）

しかし、東京高等商業学校卒業直後に同文書院の教員となった根岸よりも高橋の方が、中国現地での活動やフィールドワークについてははるかに経験を積んでいることは明らかであり、大学史は根岸の功績を過大視しすぎているのではないだろうか。また、先に述べたように「大旅行」の発想は研究所のものであり、それを根岸一人に求めるのは誤っている。

このように研究所に学んだ高橋は、その教育目標であったビジネスマンとしては短期間しか活動しなかった。しかし、同じくビジネス教育をすすめる同文書院や久留米市立久留米商業学校の教員となることによって、その研究所の教育活動を継承したのである。また、本稿が紹介した彼の「閩浙両省視察報告書」からは、同文書院の特徴である「大旅行」への影響の可能性が浮かび上がるのであり、研究所の中国に関する教育や研究をさらに発展させた人物であると考える。

## II 東亜同文書院第1期生坂本義孝について

坂本義孝（1884-1946）は福島県石城郡内郷村小島（現福島県いわき市内郷小島）で羽二重業を営む平民坂本勝次郎の三男として生まれた。1901年福島県立磐城中学校（現福島県立磐城高等学校）を卒業する。その頃家業が傾いていたことから、学費を抑えるために県費生制度がある同文書院に1901年第1期生として入学した。1904年卒業すると1905年の営口税関勤務を経て、1907年にアメリカのカリフォルニアで雑貨業や造園業を営む長兄儀助をたより渡米し、現地のハイスクールに学んだ後に南カリフォルニア大学で修士学位を取り、その後は同大東洋科に勤務しつつ、現地の日本領事館の嘱託も務めた。ちなみにこの当時の南カリフォルニア大学東洋科の教授はジェイムズ＝メイン＝ディクソンと言い、かつて東京の文科大学



図5 坂本義孝・太代子夫妻  
（東亜同文書院第1期生1921）

(現東京大学文学部)で夏目漱石に英文学を教えた人物である。1917年からはコロンビア大学やニューヨーク大学(私立、市立、州立のいずれかは不明)の大学院で学び博士学位を取った。1919年にはワシントンで開催されたILO(国際労働機関)第1回国際労働総会に日本政府代表補佐として参加している。1921年に帰国すると同年同文書院教授となり、1925年には同文書院の中国人教育部門である中華学生部の部長、1927年時点で上海日本人YMCA理事長となっている。同文書院教員となってもスイスのジュネーブで開催されたILO総会や北京のキリスト教学生大会に出席するなど国際的な活動をした。またその合間を縫ってエルサレムを訪問している。YMCAでは外国語学校の校長も務めた。1931年春同文書院を退職。同年秋に杭州で開催された太平洋会議に新渡戸稲造と共に出席した。1934年頃には帰国し、1942年再び上海に渡ると上海市政研究会や岡崎事務所(詳細不明)などに務めたという。また詳細は不明だが、日中戦争中は近衛文麿と中国要人との連絡を取ったと伝えられる(大学史編纂委員会1982:267)。1943年上海の聖約翰大学(St. John's University, Shanghai)の教授となり、1945年5月いったん帰国するが日本の敗戦直後再び上海に渡り同大で教壇に立ったものの翌年帰国し、その直後に病死した。

筆者は、坂本のキリスト教信仰に注目した分析をすでに行っている(石田2007b)。それを要約すれば、日本の中国侵略が進む状況下、その一翼を担うことが同文書院に期待されるようになると、坂本のキリスト教に基づく道義的な立場は学内で居場所を失うことになったというものである。また、同文書院の院長を長く務め学生に慕われた根津一は陽明学的な道德感に基づいて教育活動を行っていたが、それは内村鑑三が述べているように、キリスト教の立場から好意的に評価しうるものであった。

the writing of Wang Yang Ming, who of all Chinese philosophers, came nearest to that most august faith, also of Asiatic origin, in his great doctrines of conscience and benign but inexorable heavenly laws. (内村1894:24-27)

在上海日本人キリスト教信者の団体である上海日本人YMCAの理事長を務めるなど敬虔なキリスト教信者であった坂本にとっても根津の考え方は抵抗なく受け入れることができるものだったのである。

そうした坂本についての理解は現在においても変化はないが、本稿では前掲文をまとめた後に明らかになかったことなどを紹介する。

まず、伝聞に頼っていた坂本の学位については、修士論文、博士論文ともに以下のように確定した。英語圏の学位論文のデータベースであるProQuest(<http://search.proquest.com>)には次の記録がある。

The economic policy of Japan during the Meiji era (1868-1912)

By *Sakamoto, James Giko*, University of Southern California, 1913, 109 pages; EP69057

さらにアメリカ経済学会の紀要『The American Economic Review』の博士論文のリストには次のように記載されている。

Giko Sakamoto, B.S., Tung Wen College (Shanghai); A.M., Southern California, 1913. Labor Movement in Japan, 1868-1907, 1920. Columbia. (American Economic Association 1920:700)

これらから、坂本義孝(英名ジェームズ)は、論文「明治期日本の経済政策(1868-1982)」によって19

13年南カリフォルニア大学で文学修士号を、論文「日本における労働運動（1868-1907）」によって1920年コロンビア大学で哲学博士号を取ったことがわかる。ちなみに『The American Economic Review』の記録にある「B.S., Tung Wen College (Shanghai)」は、上海にある同文書院で学士を取ったということであり、アメリカ経済学会において同文書院が認められことを示している。

次に上海日本人YMCA理事長としての活動を紹介する。

上海日本人YMCAに関する資料（池田1995：168；176-177；179）や外務省文書資料（JACAR：B05015864300；B05015846800；B05015864300）<sup>2</sup>によれば、坂本は1927年から理事長に就いており、1934年10月には彼に替わって乾精末なる人物が理事長となっていることがわかる（JACAR：B05015864300）。また同時に同YMCAが運営した外国語学校校長であったこと（池田1995：176-177）、同YMCA会館教育部講師英語主任も兼ねていたともわかるが（JACAR：B0501584600）、肩書以外の具体的な活動の実態は不明であった。

上海日本人YMCA理事長としての具体的な活動は、キリスト教系の記録『The Chinese Recorder and Missionary Journal（教務雑誌）』である。この雑誌は、中国におけるキリスト教活動を伝えるために1868年に創刊されたものである。

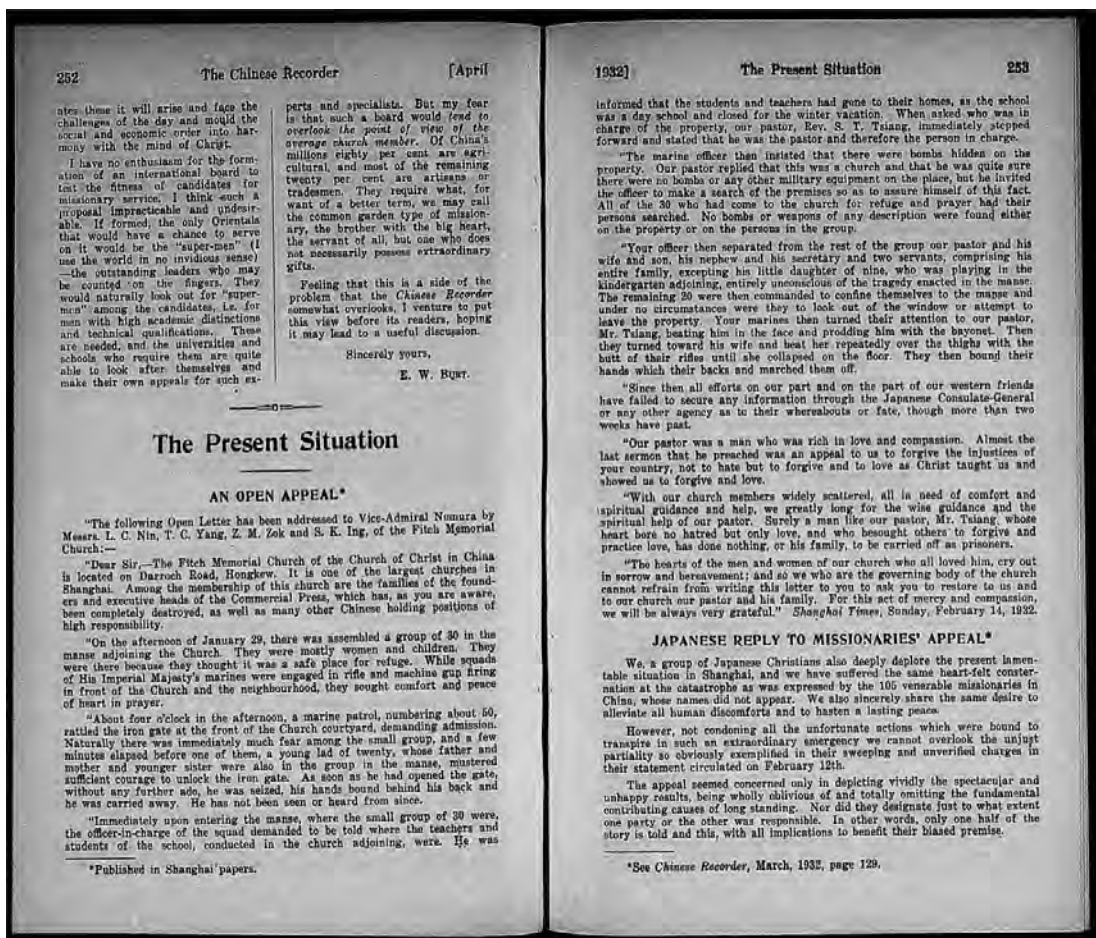


図6 『The Chinese Recorder and Missionary Journal（教務雑誌）』

<sup>2</sup> JACARはアジア歴史資料センター公開資料、アルファベットと番号は資料番号を指す。



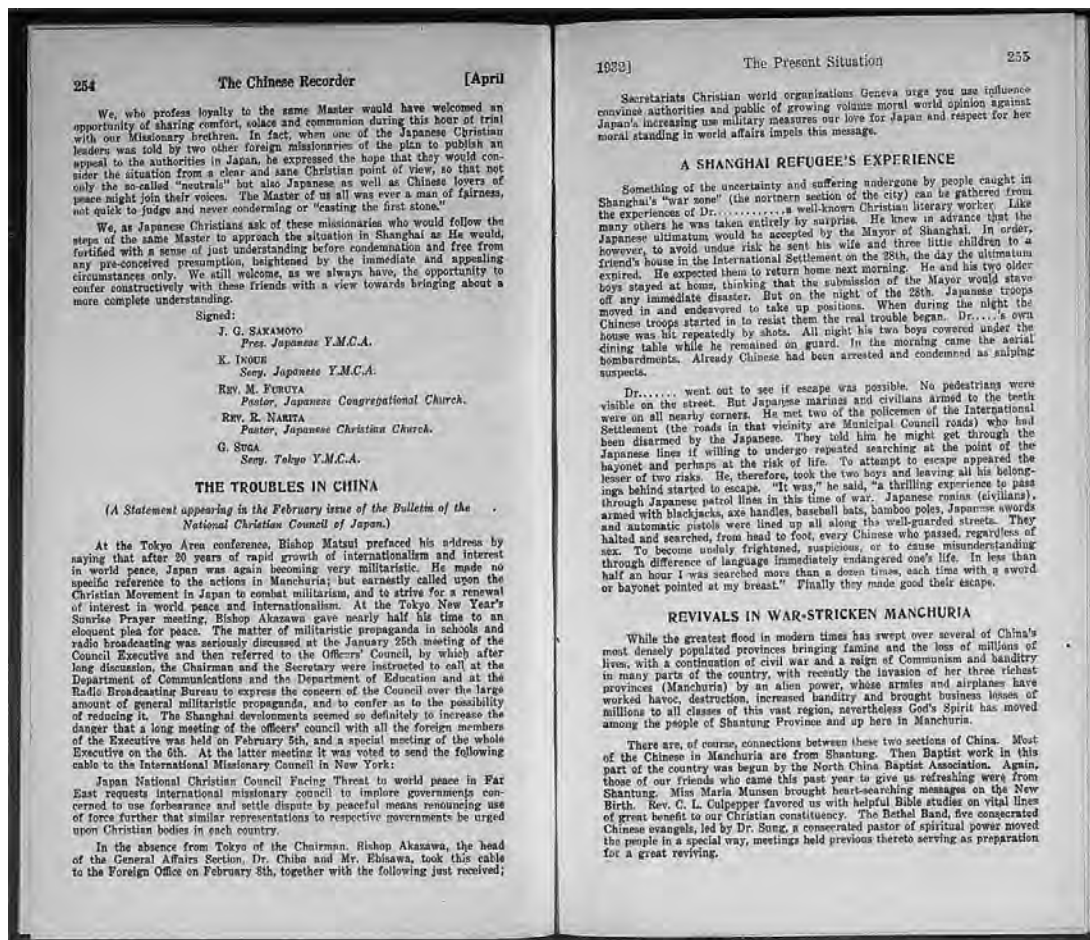


図 7 『The Chinese Recorder and Missionary Journal (教務雑誌)』

Signed:

J. G. SAKAMOTO [ジェームズ=義孝=坂本]

Pres. Japanese Y.M.C.A. [上海日本人 YMCA 理事長]

K. INOUE

Secy. Japanese Y.M.C.A. [上海日本人 YMCA 書記]

EV. M. FURUYA

Pastor, Japanese Congregational Church. [日本組合基督教会牧師]

REV. R. NARITA

Pastor, Japanese Christian Church. [日本基督教会牧師]

G. SUGA

Secy. Tokyo Y.M.C.A. [東京 YMCA 書記]

ここには 1932 年第 1 次上海事変についての日本人キリスト教信者による公開文書「Japanese Reply Missionaries Appeal」が掲載されている。上にあげるように筆頭としてサインしているのが坂本である。坂本たちは、上海の現状について憂慮していることを述べ、「We still welcome, as we always have, the

opportunity to confer constructively with these friends with a view towards bringing about a more complete understanding」と、今後の相互理解へ向けた話し合いを提案するだけで、何ら具体的な対策を打ち出すことはできていない。

また、この文書の前に掲載されている上海のキリスト教有識者たちによって出された野村吉三郎海軍中将宛ての「An Open Appeal」も上海事変に関わるものである。これは、1932年1月29日上海の虹口多倫路にあるキリスト教会鴻徳堂に海軍陸戦隊が押し寄せ、中国人牧師夫妻に暴行を加えただけでなく、家族ごと連れ去り、その後彼らが行方不明になったことへの抗議である。日本軍の蛮行と日本人キリスト教信者の呼びかけが並んでいるのは実に皮肉な光景である。

国境を越えるキリスト教を中国人と共に信仰をしても、国家の侵略行為によって坂本は日中の狭間で板挟みに置かれていたのである。そうした中でも彼は、理事長として外務省にYMCAの中国人教育活動への補助を申請しており(図8; JACAR: B05015846800)、上海在留日本人のキリスト教活動の指導者として日中を結びつけようとする活動を精力的に行っていた。ここにその信念の強さを見ることが出来る。

こうした坂本の活動について本稿で注目したいのは、アメリカで差別され、支配される立場を経験していたということである。彼がカリフォルニアで生活していた1913年、いわゆる排日土地法(カリフォルニア州外国人土地法)が可決されている。在地の排日輿論が強いものであったようであり、このことを巡って彼は南カリフォルニア大学での上司に当たるディクソンと衝突していた。

[1917年]十一月六日、市教育課に於て多数教員の集会席上、南加大学東洋科主任教授ディクソン博士の講演あり、日支関係を論じて日本の特殊権益なるものは日本の野心権なりとて極力日本を罵倒し、河上清を偽善者なりと罵りたるに対し領事館囑託坂本義孝これを弁駁す(南加日系商業会議所・代表佐々木雅実1956: 355)

日本の大学で教壇に立ったディクソンは、当時としては最もよく日本を知るとアメリカで目されたに違いない。そうした人物が徹底的に反日を掲げたことに対して、部下の立場にある坂本が敢

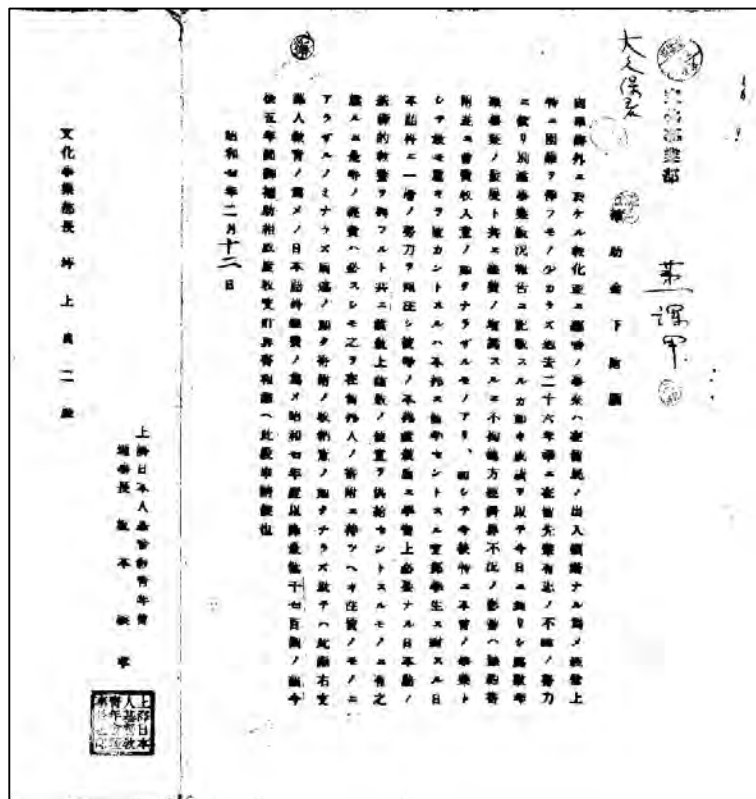


図8 「補助金下附願」：外務省文化事業部に上海日本人YMCAへの補助を求めるもの。

然と反論したというのである。この年、彼は南カリフォルニア大学勤務を辞めてコロンビア大学大学院へ入学しているが、それにはこのディクソンとの衝突が影響しているのかもしれない。

当時、カリフォルニアの日本人は弱い立場に置かれた被差別・被支配階級であり、そのような弱者の立場を実体験している坂本だからこそ、日本人から不当な扱いを受けつつあった中国人への姿勢はより真摯なものとなったのではないだろうか。

しかし、そうした日中関係についての坂本の取り組みは、日中戦争が激化していった戦前においては理想化するだけで実現性が乏しいものとなった。それは彼の身の回りにも見ることができる。

同文書院の教え子で卒業後に同文書院助教受となった台湾出身の彭盛木（別名彭柯木、同文書院第23期生中華学生部）は、日本軍に監視されるような情報活動に従事したと伝えられる（許2002）。同じく同文書院の教え子である洪水星は、同文書院卒業後は坂本の斡旋で京都帝国大学に入学し、さらに坂本の推薦で聖約翰大学の日本語教員に就くなど、いわば坂本の愛弟子であった。しかしその彼は意外にも満鉄調査部事件で逮捕されたマルクス主義者である大上末広の取り調べ時の手記に登場するのである。



図9 彭盛木（同文書院助教時代・同文書院第33期生卒業アルバムから）

自分〔大上〕は昭和六年九月に外務省の支那留学生を命ぜられ間もなく満洲事変が始まりましたが同年十二月上海へ行き田中忠夫と交際し田中の紹介で朱其華に会い、又洪水星の紹介で某支那人に会い支那経済のマルクス主義的研究を深め且つ資料を集めんとしましたが間もなく上海事変が起ったので一時避難の目的を以て七年二月に大連に来て天野元之助氏方に厄介になりました（小林・福井2004：77）

このように満鉄の大上のマルクス主義資料収集に協力していることからすれば、洪もその系列に連なる人物であったと考える。宗教をアヘンにも例えるマルクス主義は敬虔なキリスト教信者である坂本にとっては警戒すべきものであった。しかし実際には彼の身边にまでその影響が及んでいたのである。

このように坂本の教育活動は日本の侵略と興隆する左翼活動の中で實質的に頓挫していたのである。参考として、これまでに筆者が確認している坂本による文章の一覧を附す。

- (1912) 「滯米印象記」『滬友』(17)東亜同文書院同窓会
- (1921) 「同じ経験から」『滬友』(17)
- (1922) 「北京大会の意義」『滬友』(19)
- (1923) 「公人私人」『上海』(523)春申社
- (1923) 「エルサレムにて」日本基督教青年会同盟『開拓者』18(5)
- (1923) 「渡欧の途上より」『滬友』(21)
- (1923) 「西本氏経営週報『上海』を推奨す」『滬友』(21)
- (1923) 「公人私人」『上海』(549)
- (1924) 「一人一言」『滬友』(23)
- (1924) 「書院の反省時代」『滬友』(24)

- (1924) 「改新時代の書院」『滬友』(25)
- (1924) 「遠藤保雄君を憶ふて」『滬友』(25)
- (1924) 「同窓と書院新興の気運」『滬友』(26)
- (1925) 「同窓会員として」『滬友』(27)
- (1925) 「中国に於ける経済的協同」東亜同文会調査編集部『支那』16(8)
- (1925) 「媽々鋪子戸籍調べ」『滬友』(28)
- (1926) 「甲辞：書院近状故手塚教授の追悼法会」『滬友』(29)
- (1926) 「甲辞：真島教授逝去」『滬友』(29)
- (1926) 「東西南北集 漫言漫録」『滬友』(29)
- (1926) 「五卅事件と米支両国の関係」『支那』17(8)
- (1926) 「護憲社の性質と事業」東亜同文書院研究部『支那研究』7(2)(11)
- (1927 [1930]) 「弔詞」『山洲根津先生伝』根津先生伝記編集部
- (1927) 「支那に於ける教育権回収の観測」『支那研究』8(2)(14)
- (1928) 「英雄出現と馬上統一は果して夢なる乎」『上海』(768)
- (1928) 「外人の観たる支那」日華学会『日華学報』(7)
- (1930) 「支那の命運を傍観すべきか」『支那』21(2)
- (1930) 「青年会は何をしているのか」上海日本人基督教青年会『上海青年』15(7)古屋孫次郎発行
- (1930) 「上海の将来」『支那研究』9(3)(18)
- (1930) 「中日親和の要諦」『日華学報』(12)
- (1933) 「滿州問題と日支共存共栄」『上海』(899)上海雜誌社
- (1933) 「対支外交の要諦」『上海』(908)
- (1934) 「非常時と我が外交政策」『上海』(913)
- (1934) 「門下生の霞山公想い出」『支那』25(2)
- (1934) 「滿州国に対し大国的寛度を持てよ」『上海』(921)
- (1934) 「支那の安全保障に就いて」『上海』(929)
- (1934) 「支那の安全保障に就いて(下)」『上海』(932)
- (1935) 「日華両国提携に関する基本条件」『上海』(940)
- (1935) 「対日態度に関する支那言論界の趨向」『上海』(940)
- (1935) 訳「支那の対日言論：一、密勒氏評論報；二、中国評論週報；三、民国週刊」『上海』(941)
- (1935) 「替行式排日を根絶し得るや」『支那』26(8)
- (1935) 滬友同窓会総代坂本義孝代読「滬友同窓会の祭詞」「靖亜神社鎮座祭式典」『支那』26(12)
- (1939) 「根津先生十三回忌法要並に追悼晩餐及座談会」『支那』30(3)
- (1935) 「興亜政策の難易弁」『支那』30(5)
- (1939) 「時局收拾に関する示唆」『支那』30(12)
- (1942 [1995]) インタビュー「燎原の火の如き民族精神」木村英夫『民族の咆哮：秘録・聖戦と皇軍その実態』雲母書房

### Ⅲ東亜同文書院第25期生大内隆雄事山口慎一について

大内隆雄（1907-1980）、本名山口慎一は福岡県山門郡柳河町大字常盤町（現福岡県柳川市常盤町）に士族山口参七郎の長男として生まれた。福岡県立中学伝習館（現福岡県立伝習館高等学校）で1年間学んだ後、1921年満鉄が運営する長春商業学校（後の新京商業学校）に入り、1925年に満鉄派遣学生として同文書院に第25期生として入学した。上海では田漢や郁達夫と交流している。また満鉄社歌歌詞募集に当選した。卒業後は満鉄の総裁室情報課勤務や同社経済調査会資料編纂班主任として『満鉄調査月報』編集などの調査活動に従事した。これらは後年満鉄調査部と称されたセクションの前身である。その傍ら『満洲評論』の第2代編集責任者を務めつつ、政治経済分野の評論や翻訳を精力的にこなした。満鉄時代には、当時日本に滞在していた郭沫若を訪ねている。1930年治安維持法違反で摘発され、1933年にも同容疑で再び摘発されると満鉄を解雇され、大連から追放された。東京に一時滞在した後、1934年奉天に渡り、その後新京に移って新京日日新聞社や満洲映画協会に勤務しつつ、古丁をはじめとする「満洲国」の中国人作家の作品を大量に翻訳するなど文芸分野で活躍した。1946年帰国、翌年宮崎県延岡市役所に入り、同市立図書館勤務を経て緑ヶ丘学園（旧聖心ウルスラ学園短期大学・現聖心ウルスラ学園高等学校）の英語教員となった。著作には、大内隆雄名義では『満人作家小説集原野』（三和書房、1939年）、『満洲文学二十年』（国民画報社、1944年）、本名では『東亜新文化の構想』（満洲論社、1944年）、『中国札記』（私家版、1958年）などがある。

大内はきわめて優秀な学生であった<sup>3</sup>。現役の学生であるにもかかわらず、同文書院の学術紀要『支那研究』や同校を運営する東亜同文会会の機関誌『支那』に次のような文章を発表している。

（1926）訳「浙江省自治法（十五年一月一日公布）」『支那研究』第7巻第1号通号第10号、東亜同文書院支那研究部

（1927）「支那現代劇の概観（上）」『支那』第18巻第2号、東亜同文会調査編纂部

（1927）「支那現代劇の概観（下）」『支那』第18巻第3号

（1927）「支那に於ける資本主義発達の過程」『支那』第18巻第6号

たんなる早熟な秀才というわけではなく、学内活動にも積極的に参加し学園生活を楽しんでもいた。25期生の校友会幹事を務めて卒業記念文集の編



図10 大内隆雄事山口慎一（同文書院第25期生卒業アルバムから）



図11 同文書院校友会（前列右から3人目が大内・同文書院第25期生アルバムから）

<sup>3</sup> 2006年7月22日筆者聞き取り。

輯兼発行者となったり（東亜同文書院第25期生1929）、講演部部員として1927年四国遊説や1928年東北遊説に参加したりしている（大学史編纂委員会1982:238）。1928年の「大旅行」では森本辰治、日高清磨、中崎一之と共に「華南、滇越南沿線経済調査班」として汕頭、廈門、香港、広東、仏領印度支那、雲南、台湾を旅している（東亜同文書院第25期生1929）。さらに学芸部部員として、その機関誌『江南』や在上海邦字紙『上海日日新聞』などへ文学作品や評論文を掲載したり、当時文学サロンと化していた内山書店にも出入りしていたりしていたと伝えられる（大学史編纂委員会1982:230）。郁達夫の文章に「公開状答山口君（1927）があるが、この山口とは彼のことである。



図 12 同文書院講演部（前列右端が大内・同文書院第25期生卒業アルバムから）

さて学芸部は、山名正孝（第26期生・後に神戸商科大学教授）、尾崎庄太郎（第26期生・後に中国研究所設立）、西里龍夫（第26期生・後に日本共産党党员）たちを部員とする同文書院の左翼運動の中心であった。大内と在学期間が重なる安斎庫治（第27期生・後に日本共産党党员）は、1931年の同文書院学生ストライキを主導し、さらに上海訪問中の海軍少尉候補生に反戦ビラを配布して退学処分を受けている。彼ら学芸部と直接の接点は見いだしていないが、ゾルゲ事件で有名な尾崎秀実が上海で活動していたのがちょうどこの時期であった（1927-1932）。そうしたマルクス主義を是とする空気に触れていたことは、後に満鉄で左翼として治安維持法違反で摘発されることに何らかの影響を与えたのかもしれない。

その一方で大内は、同文書院の創立者根津一について研究をかなりしていた形跡がある。1927年死去した根津の追悼集会在同文書院内で開かれたが、そこで彼は根津（号は山洲）を顕彰、研究する団体「山洲会代表」として「弔辞」を読んでいるのである。その中には次の行がある。

私は先生の伝記編纂の仕事をお手伝ひしている関係で、先生がその晩年に自らお書きになったものを拝見することが出来ました（東亜同文書院滬友同窓会1930:191）

ここに出てくる「伝記」とは同文書院の同窓会である滬友会が中心となって刊行した『山洲根津先生伝』のことであろう。大内が入学した頃には根津はすでに引退しており、二人に面識はない。しかし、大内には根津の著作を読むことによって、その活動を知り、考えを理解する機会があったのである。

この根津は徹底した日中提携論者であった。同文書院の開校では、その設立趣意書「興学要旨」に「講中外之美学。育日清之英才。一以樹清国富强之基。一以固日清輯協之根。所期在乎保全清国而定東亜久安之策。立宇内永和之計」[中外の実学を講じ、日清の英才を育て、一つは以て清国富强の基を樹て、一つは日清輯協の根を固む。期する所は清国を保全して東亜久安の策を定め、宇内永和の計を立つるに在り。]（東亜同文会1901:5）と記し、張之洞や劉坤一など清国有力者の協力を取り付けている。辛亥革命では「我が国が之に干渉するが如きは支那の為にも、また我が国の為にも毫も利益なきして、害のみあることである」（鈴木1911[1979]:31）と不干渉を主張し、対華21ヶ条要求については「日本の不正義に由るものにして、独り支那国民之れを暴戾視するのみならず、支那在留諸外国人も其の日貨排斥を以て日本の自業自得となす所、惟ふに汝に出でたるものは汝に反る。自ら犯すの罪は宜しく之を自ら償はざるべからず」（東亜同文書院滬友同窓会1930:352）と反対しており、日本の利益のために清国あるいは中国を損な

うことを由としなかった。

こうした姿勢は、同文書院の教育趣意書「立教綱領」で「徳教為経。批聖經賢伝而施之。智育為緯」[徳教を経と為し、聖經賢伝に批りて之を施す。智育を緯と為す]（東亜同文会 1901 : 9）と述べるように儒教的な倫理観に基づいていた。

根津の思想で興味深いのは、学内のキリスト教活動を認め（石田 2007b）、「マルクスの唯物史観の如きも一応道理ある議論」（東亜同文書院滬友同窓会 1930 : 358）と言うように左翼思想に一定の理解を示すなど、その思想が決して排他的ではなかったということである。異なる考えを攻撃するのではなく、例えば「[西洋哲学] 今や研究年を経るに及び漸く其の極致に近づきつつあり、然して之が数千年前に説ける東洋哲学に一致するものあるを認めたる結果なりとす」（川畑 1955 : 100）と言うように、東洋思想の中にはすでに現在の西洋思想が唱えているものは存在していると捉える、つまり異なる考えを自身の思うところに内包していこうとするのである。

実際、根津の日中提携は成功しており、中国側のさまざまな協力を得て「大旅行」を継続的に実施したり、1913年の第2革命で高昌廟桂墅里校舎が焼失した際には中国政府から賠償を受けていたりしている。1918年「大旅行」に参加した中山優（第16期生・後に建国大学教授、満洲国駐中華民國公使、亜細亜大学教授）は内戦最中の最前線を双方の協力を受けて通過して旅を続けてさえている（石田 2015）。同文書院の教育活動は中国の了解だけでなく積極的な協力のもとに進められていたのである。

このような根津による同文書院の日中提携の成功例を大内は知り、学生として体験していたという事実は重要である。大内の「満洲国」での翻訳活動について論じた岡田英樹は、訳者名が判明した「満洲国」当時の文学作品 142 篇の中、大内のものは 110 篇であったと述べ（岡田 2000 : 225）、その圧倒的な訳業を評価するが、その一方で次に引くような大内の「満洲国」への姿勢を批判する。

これは奔放な空想である。だが、少しのヒントをでも与え得たならと考へる、執筆の動機は現実的なものである。

第一に、満洲には各種の民族が雑居してゐる、そしてその文化の程度も違つている。異なる色彩の民族文化の存在は眼前の事実であつても無視することは出来ない。（社会主義ソ連を見よ、各民族はその特有の文化をますます発展せしめつゝある）

普通教育に必要な最大の注意点は、民族融和精神の浸透——いよいよ社会連帯心の養成であらう。侵略主義を排せよ。また卑屈な排外主義を圧するがよい。尤も、この根本には、各民族の實際生活に於ける平等がなければならぬのだが、——経済的にも、政治的にも、

一の共通語の普及は、極めて有益であるだらう。私は、それには支那語とエスペラント語とを推す。数に於ける支那文化（支那語）の優越と、補助語の利用。（大内 1932 [1944] : 178-179）

岡田は、これについて「その後の歴史を知るものにとっては、なんとも甘い夢物語かとあきれるばかりである」（岡田 2000 : 224）と結果論から批判を述べ、さらにその思想を次のようにまとめている。

大内はこの「理想主義」に足場をおくことで、上海時代の左翼文学青年との交流や、中国共産党への共感と自己矛

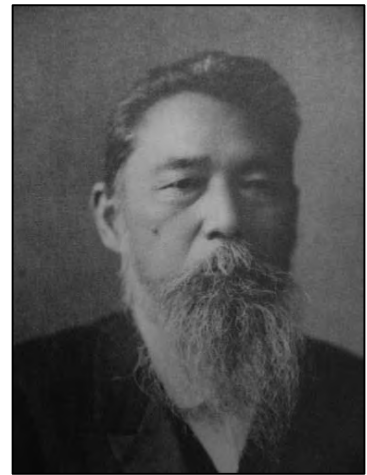


図 13 根津一（同文書院第 25 期生卒業アルバムから）

盾をきたすことなく、満洲国の建国という事態をうけいれることができたのであった。(岡田 2000 : 224)

上掲の大内の「満洲国」への理想の言葉は、もともと建国直後の 1932 年のものである。ここで注意したいのは、帝国日本の退勢や「満洲国」の理想の危うさが明らかになっていたのであろう 1944 年の時点において、彼は再びこの理想を自著に引用していることである。これは何を意味するのだろうか。そこには根津による同文書院での成功体験に裏付けられた日本人と中国人の提携路線への信念があるのではないだろうか。

## おわりに

本稿は、同文書院とその前身校である研究所の教育について、それ自体にアプローチするのではなく、外郭とでもいうべき卒業生の活動に焦点をあて輪郭を浮かび上がらせることによって、その実像を明らかにしようとした。

日清貿易研究所卒業生高橋正二については、研究所が目標としたビジネスマンとしてはほとんど活動しなかったものの、同文書院や久留米市立久留米商業学校の教員として母校が進めたのと同じビジネス教育に従事しており、研究所の教育活動を継承していた。また彼が同文書院の地誌的なフィールドワークである「大旅行」に影響を与えた可能性があり、今後の厳密な検証が必要なものの、もしそうだとすれば研究所の中国についての教育や研究を拡大発展させた人物と理解されることになる。

同文書院第 1 期生坂本義孝は、卒業後にアメリカで博士学位を取得し、ILO 総会に参加したり、上海の聖約翰大学の教授となったりするなど国際的な活動を展開した。母校の教員としては中華学生部部长として中国人教育を担っている。また、敬虔なキリスト教信者でもあり、上海日本人 YMCA 理事長を務め、そこでも中国人へ教育活動を行っていた。

子息義和(東京大学名誉教授)によれば、「日本人は信用できないが、中国人は信用できる。自分が居るべきところは中国だ」(坂本 2008)と話し、また日本は満洲事変以前の状態に戻るべきであるという意見を抱いていたと言う。しかし、日中関係の悪化と宗教に厳しい姿勢を取るマルクス主義の台頭の中で、同僚や教え子といった近い人物ですら抗日や左翼的活動に従事することになり、キリスト教信仰を共にする中国人からも日本の侵略行為を問われる苦境に追い込まれた。

同文書院第 25 期生大内隆雄山口慎一は、「満洲国」で中国語作品の翻訳に精力的に取り組んだ。当時ほとんど影響力をもたず、日本人はもちろん中国人間においても知られていなかった「満洲国」在住中国人による中国語文学作品が、「満洲国文学」としてカテゴライズされるのは、大内による大量の翻訳によるところが大きいと考える。彼は「満洲国文学」の立役者ともいえよう。そういった姿勢は「満洲国」の共通語に中国語を提言したことからわかるように日中提携論に基づくものであった。それは同文書院での学園生活を通して培われたものである。同文書院は日中提携論者である根津一によって創立し、その方針のもとで中国側の協力も得て教育活動を行っていたのである。同文書院自体が日中提携論の成功事例であり、大内はそれが「満洲国」で実現されることを信じたのである。しかし、彼の活動もまた坂本と同じく日本の中国侵略の前に破綻を余儀なくされた。

本稿で取り上げた 3 人は、卒業後それぞれまったく異なるキャリアを形成したが、全員が同文書院や研究所で受けた教育を各々の形で受容して活動していた。高橋正二は母校のビジネス教育を受け継いでいたし、坂本義孝は同文書院中華学生部や聖約翰大学といった学校組織だけではなく YMCA において



も対中国人教育活動に従事し、大内隆雄は日本人の中国理解を促すことになる中国語作品の翻訳に努めていた。いずれも日中提携が基層に存在するものであり、日中が全面的な戦争状態に入る第2次上海事変の前年1936年に死去した高橋以外の2人の活動はいずれも破綻している。しかし、それは戦争の影響によるものであって、彼らの中国へのアプローチが誤っていたわけではないのであり、現代の日中関係について参考に資するものとなるのではないだろうか。それは、彼らの活動の出発点となった同文書院や研究所の教育についても同様である。

なお、引用文中の旧字体と繁体字は新字体に改めている。

本稿はJSPS 科研費基盤研究(C)26370747 助成による研究成果の一部である。

## 参考文献

荒尾精(1891 [2011])「荒尾所長二月廿八日演説筆記」『上海新報』第49号、不二出版。

郁達夫(1927)「公開状答山口君」『洪水』第3巻第30期。

池田鮮(1995)『曇り日の虹：上海日本人YMCA40年史』、上海日本人YMCA40年史刊行会。

石田卓生(2007a)「東亜同文書院高昌廟柱墅里校舎について」『愛知大学東亜同文書院大学記念センター／オープン・リサーチ・センター年報』第1号。

————(2007b)「東亜同文書院とキリスト教：キリスト教宣教師坂本義孝の書院精神」『中国21』第28号、愛知大学現代中国学会。

————(2009)「大内隆雄と東亜同文書院」『中国東北地方文化研究の広場』第2号、「満洲国」文学研究会。

————(2015)「中山優写真資料について」『同文書院記念報』Vol. 23、愛知大学東亜同文書院大学記念センター。

————(2016a)「戦前日本の中国語教育の変遷：東亜同文書院を事例として」『同文書院記念報』Vol. 25別冊①、愛知大学東亜同文書院大学記念センター。

————(2016b)「日清貿易研究所の教育について：高橋正二の手記を手がかりにして」『現代中国』第90号、日本現代中国学会。

内村鑑三(1894/1908 [2002])『代表的日本人』、講談社インターナショナル。

大内隆雄(1932 [1944])「満洲文化建設私案」『満洲情報論』昭和7年4月16日号、『満洲文学二十年』下巻、国民画報社。

岡田英樹(2000)『文学こみる「満洲国」の位相』、研文出版。

川畑豊治(1955)「山洲根津一先生の『古本大学』講義」滬友会編『東亜同文書院大学史』。

許雪姬(2002)「1937-1947年在上海的台湾人」『台湾学研究』第13期、国立中央図書館台湾分館。

坂本義和(2008)筆者宛書信。

鈴木正節(1911 [1979])『太陽』1911年12月号『朝聞館「太陽」の研究』アジア経済研究所。

久留米市立久留米高等商業学校・久商百年写真集編集委員会(1997)『久商百年写真集』、久留米市立久留米高等商業学校。

久留米市立久留米高等商業学校・久商百年史編集委員会(2002)『久商百年史』、久留米市立久留米高等商業学校。

小林英夫・福井紳一『満鉄調査部事件の真相：新発見史料が語る「知の集団」の見果てぬ夢』、小学館。

大学史編纂委員会(1982)『東亜同文書院大学史』、滬友会。

東亜同文会(1901)『東亜同文会報告』第18回。

東亜同文書院滬友同窓会編(1930)『山洲根津先生伝』根津先生伝記編纂部。

東亜同文書院第25期生(1929)『線を描く』、東亜同文書院。

日清貿易研究所(1890)『日清貿易研究所規程』「日清貿易研究所荒尾精出願ニヨリ内閣ニテ刊行ノ書籍交付ノ件」、国立公

文書館所、請求番号：纂00159100。

野口武（2016）「日清貿易研究所生一覽表の作成と『対支回廊録』編纂をめぐる若干の考察」『Occasional paper』No. 5、愛知大学国際問題研究所。

函館市（1980）『函館市史』通説編第2巻、函館市。

南加日系人商業會議所・代表佐々木雅実（1956）『南加州日本人史』

吉川三次郎（1901）『清国福建浙江省内鉄道線路踏査報告書』、三井營業店重役会。

American Economic Association（1920）*The American Economic Review*, Vol. 10, No. 3.